

岩魚記

りんご丸

岩魚は口から伸びる糸の先を見つめていた。玉網（たも）に体を横たえ、走り終えた運動選手のように口とエラを動かしていた。

エラを開け閉めするたびに、エラに鋭い痛みが突き刺さる。それでも動かさないわけにはいかない。

どうにもならん。

そう、どうにもならなかった。

岩魚は痛みを耐えながら、相手がこのあとどう出るのだろうかと思った。むろん、ことばで思ったわけではない。岩魚は、ことばは話せない。

逃げる機会はずがある。岩魚は経験でそれを知っていた。場合によっては岩魚はもうひと暴れするつもりでいた。それぐらいの力は残してある。

まだ負けたわけじゃない。

自然界の掟では命がある限り負けではない。

岩魚はこの日、いつものように川のよどみで目をさました。本流から少し外れた、川岸の深みである。夏の水温の高いときでも・・・岩魚は水温が十五度以上になると生きられないといわれる・・・この水底（みずぞこ）にじっとしておれば涼しく過ごせる。鉄砲水が出たときでも流れにもっていかれることはない。渇水期で川底が現れるときでも、よどみは小さな池となって残る。川の深みとそれをおおう枝葉はトビや水鳥から身を守ってくれる。

岩魚はこの川で生きて三年になる。

同じ川にはカジカガエルやアカハラ、ハコネサンショウウオも住む。カエルが、生きた岩魚を捕食することはないがその逆はある。皆、岩魚には一目置いて彼のじゃまをすることはない。

岩魚はいまではこの川のどんな変化でもいい当てることができた。水底にいただけで季節の変わりがわかる。天気の変化も予測がつく。川面が急に暗くなったら次には水のつぶが川面を打つ。それがまる一日も続けば、川が濁り、川の深みが増すことぐらいは知っている。

川は、岩が重なり、小さな滝をあちこちに作っている。その落ち込みを駆け上りまたそこを下る。いくら泳ぎまわっても疲れることを知らない。水の中にいることが楽しくてならない。子どもが自由ということばを知らずに自由を享受するように、岩魚もまた自由ということばを知ることなく自由であった。最上流にはダムでせき止められてできた滝壺がある。泳いでいこうと思えばその滝壺までだっていけそうな気がする。川が続く限り、どこまでもいけそうな気がした。

この透明な液体がもつ粘性も、魚にとっては、鳥にとっての空気抵抗みたいなもので、むしろ有効に作用する。それを利用して、水面上にかかるく三十センチは跳んでみせる。跳ぼうと思えば一メートルは跳べるが、そうすると戻りも一メートルである。そこに危険が潜むことは岩魚でも知っている。

岩魚は空中で自分の住む川を見た。いままでに、なんども見た、おなじみの光景である。落ち

しな、みんなが、自慢の尾びれを見てくれたか気になった。

アカハラやサンショウウオも尾を持つ。

彼らの尾はいったいなんの役にたつというのだ？尾びれはこうやって使うものだ。

誰にいうともなくいった。

ガラスのような水中世界から青い空と雲が見える。水の動きが流れとなって見える。岩にぶつかる水の音がと切れなく続く。気泡が弾丸のように飛んでくる。砂が巻き上がる。

そのうち、毛虫が無駄な努力をしながら流れてくる。岩魚はその努力がむだなことを教えてあげる。羽化した水中生物が川面を乱舞する。岩魚は水面に飛び、それをくわえて反転する。

小さな木の枝に飛びつくこともある。流れてきた葉っぱをくわえて吐き出すこともある。岩魚は誰にも見られなかったことを願い、ゆっくりと反転する。

百発百中とはいかない。

岩魚はそれほど目がよいわけではない。水は流れている。濁っているときもある。泡だっているときもある。人が空気中でものを識別するのに比べたら魚のほうは分が悪い。川に潜り、魚になったつもりで水中をのぞいてみればわかる。エサかどうか判断を迷っているうちにそれは流れていく。瞬時に判断のつかないものはとりあえず口に入れる。違っていたら吐き出せばよい。吐き出すまでもないものはエラの間から出ていく。自分のエサ場に侵入する魚も追わなくてはいけない。河原の石が不自然な音をたてることもある。川面に雲や木の葉の影とは別の影が映ることもある。

岩魚はそうやって一日になん百回も浮いたり沈んだりする。飲み込んだり吐いたりする。

それでなんの問題もなかった。

ついさっきまでは。

なんということだ。

岩魚は自分の身になにが起こったのかまだよく理解できないでいた。

いつものように、上流に目を向けていた。木の葉にまじって虫らしきものが流れてきた。虫にしては不自然である。動きに一貫性がない。不自然なものもまた魚類の興味をひく。岩魚は反転して追いつく。口にしようとしたとき、虫がほんの一瞬、川の流れに逆らって移動した。岩魚はそれを追うことはしなかった。このとき、岩魚が判断に要した時間は0。一秒にも満たない。不自然な虫はそのままどこかへ消えた。なんどか同じ虫が流れてきた。岩魚は気にもかけなかった。

。テナガエビはだませてもオレ様はだませないよ。

しばらくして、こんどは別の虫が流されてきた。

こんどの虫は川に流されながらもそこから必死に逃れようと努力していた。その努力が気にいった。

追いかけて飲み込んだ。飲み込んだ瞬間、口の中に違和感を覚えた。口がかってに吐き出した。ところがそいつは口の中から出ていくどころか岩魚の肉にかみついた。エラから出そうとして出ていかない。そのうち急に肉を引っ張られた。あまりの痛さに、その引く力についていくしか

なかった。自慢の尾びれをもってしても抗しえないほど引く力が強い。肉がちぎれそうに痛かった。

ふつう、このテのやっかいものは水中でなんとか体を振るか、水面に飛び出て体をひねれば造作なく外れる。それで外れなくても、釣り手がハリスを手にしたときのハリスのゆるみ加減で外れることもある。

それがそうはならなかった。

どこに自分の落ち度があったのだろうか。

岩魚は考えてみた。

なにも思いつかなかった。

岩魚はカエルを食べるほど獰猛な反面、臆病な生き物である。事実、ついでしたがた上空をかすめた影に岩魚はどこかに身を隠さなくてはと思った。その影がなにを意味するのか、改めて考えるまでもない。体がかってに反応したのだ。

岩魚が囚われていた場所は住処とは反対側の河原である。川岸が湾曲しそこに小石や砂が堆積している。川底が浅く、本流に比べ流れがおだやかである。ほとんど流れていないといってよい。

身に刺さった鉤がどんなに鋭い痛みを伴うものであるか。それを知りたければ試みに自分の手にでも刺してみるとよい。ナイフで切った傷のほうがはるかに苦痛は少ない。

なんとしても元の川に戻りたい。元の場所に戻り、この教訓を血と肉にしなければならない。そのためならどんなことでもしよう。

このやっかいものさえ外れてくれたら。

岩魚は思った。

そうならば……自慢の尾びれで水をひと打ちし、網の外に跳躍してやる。水に飛び込めさえすればあとは自分のかってである。巢に帰ってみんなに自慢してやろう。どんなに痛かったか。どんなに苦しかったか。どんなに恐怖におののいたことか。それらの苦境からおれさまがどんな機転をきかせて逃げてきたかを話して聞かせよう。みんなおれさまの武勇伝聞きたさに集まってくる。おれさまが味わった痛みに比べたらあんたらなんかの苦痛は屁でもないよ。と、そこでかたわらのテナガエビをパクリとやってやろう。自然界ではちょっとのゆだんが命取りになるということを教えるために。

この日、釣り人は宿を七時に出た。釣りに出たときはいつも泊まる民宿、富士野屋である。昼飯用にと、前の晩におにぎりを二個頼んでおいた。ご飯に豆を混ぜて炊いたおにぎりである。この豆がおいしい。もうひとつは蜂蜜につけた梅が入っている。

うんと釣れるといいですね。

奥さんが出しなにいってくれた。

村はずれの橋のたもとから川に入った。

エサ釣り禁止。これより上流C & R区間

の表示があった。C & RとはCatch & Release（釣ったのち放流）の意味である。

仕事と金銭のやりくりをつけ、三時間かけて釣りに出た。いつもなら釣りの師匠と一緒にのだが、今回は師匠には内緒できた。

いつまでたってもお前は上達しないな。バカじゃないか。

バカじゃないかのひとことが気に障った。仕事の気分転換を兼ねて釣りに出ている。遊びに来てまでバカ呼ばわりはない。釣りを極めるつもりは毛頭ない。上達なくてけっこう。楽しめればよいのである。日常を離れ、自由な時間を過ごしたかった。

しばらくあたりがなかった。あるいは魚が反応しているのに、こちらが気づかなかっただけかもしれない。まあ、どちらでもいい。どんどん釣り上った。先行者はいない。極力、川の中に足を入れないようにする。魚は、水が岩にぶつかる音と人が足でつくる水音を聞きわける。

川岸のごろた石の上を、音をたてないように飛び歩く。自分の背丈ほどの草をかき分ける。川の中に置かれた岩の上に慎重に足を乗せる。濡れた石ほど滑りやすいものはない。

安全だと思った岩でも体重をあずけたとたんにぐらつくことがある。均衡を失って岩に腰でも打ちつければその場で動けなくなる。釣りどころではない。

漁法は「テンカラ」である。釣り餌の代わりに、鳥に羽で作った疑似餌をつける。竿長三メートル半、それに四メートル半ほどの道糸とハリスがつく。竿先は手で引いて円を作れるほどしなやかである。たたむと横笛ほどの長さ、軽さになる。

川岸から竿を振って川へ毛鉤を落とす。渡渉して中洲に渡る。そこで竿を振る。

竿を出すとき、釣り人はいつもある釣り好きの小説家の文章を思い出す。

・・・川に入ったら川に同化しなくちゃいけない。

要するに人間としての気配を消さなくちゃいけない、ということだろう。

釣り人は川に入っているときはいつも、その作家が隣にいるような気もちになる。

釣りは人を哲学者にする、といった人もいる。確かにそうかもしれない。林道を歩きながら、川床を歩きながら、また瀬に竿を出しながら、釣りをする人はさまざまなことを考える。釣りは人に考える時間を与えてくれる。

釣り人にも彼流の哲学がある。哲学というか心得みたいなものである。それは、釣り師自身がおいしいと思わないエサには魚も食いつかない、というものである。川虫にせよ疑似餌にせよ、それで魚を得ようとするなら、まず自分で見ておいしいと思わなくてははいけない。事実、鉤先に疑似餌をつけてなんども放り込んでいるとその疑似餌がおいしそうに見えてくる。そうならなければ魚は釣れない。そんなことを考えながら釣り人は川に糸先を放り込む。

その後、いっこうにあたりがなかった。竿を後ろに振ったとき、後ろの木に毛鉤をひっかけてしまった。ハリスと毛鉤を失った。こんなときは師匠がいなくてよかった、と思う。

早めの昼飯に決めた。ザックから握り飯を出し、手近の石に腰を下ろした。ふた口食べたところで、頭の上でなにやら風を切る音が聞こえた。ほぼ同時に左手に鋭い痛みを覚えた。握り飯を落としてしまった。そこへまた羽の、風を切る音がして、地面の握り飯をつかんでいった。トビであった。昼食を奪われた悔しさよりも、その賢さに感心した。梅入りの握り飯を両腕で隠すように食べた。

そのトビは、釣り人が村から川に入るのを、村の上空、およそ四十メートルのところを旋回しながら見ていた。

トビは両端で一・四メートルにもなる翼で上昇気流を捉え、ほとんど、はばたくことをしない。カラスやハト、ワシ、タカ、その他の鳥類は、宙を飛ぶときは常にはばたく。よほど鳥に詳しくない者でも上空に目を向けて、そこに旋回している鳥がいれば、それがトビだということをい当てられる。

トビは、釣り人が橋のたもとから川に入るのを見た。いずれ釣り人がなんらかの魚を釣り上げるであろうことはわかっていた。だが釣り人の釣果ほどあてにできないものはない。村の漁協小屋の横に、六十匹ほどのヤマメを開いて日干しにしてあるのも目に入っていた。ヤマメの天日干しは上から金網でおおいをかけられている。カラスでさえも、くちばしを差し込めない。トビは、金網があげられる瞬間もねらっていた。

トビは上空四十メートルの高さから地上にある十センチ程度の物体が食べられるものかどうかを見わけることができる。ためしに小さな石ころを宙に放っても、トビは旋回したままである。パンのひとかけらを宙に放ればたちまちのうちに降下してくる。降下速度が間に合わなければ地に落ちたパンのかけらを、馬に乗った騎手が、馬を走らせながら地面に落とした帽子を拾うかのように、みごとに捕っていく。

村に小型トラックが入ってきた。荷台に積んでいるものが気になった。犬が一匹いる。横に鹿が横たわっていた。トビの目はそれを見逃さなかった。鋭いくちばしが日の光で一瞬光った。羽毛の中にたたんだ爪がうずいた。

釣果があてにならないとはいえ、釣り人からも目を離せない。トビはさらに高度を上げて村の中と釣り人が視界に入るようにした。

人間は、鳥類からすれば、ときどき間の抜けた行動を取る。ゆだんがならないのは、むしろ仲間のトビのほうである。

対岸によどみがあった。釣り人はそこに魚が潜んでいるとにらんだ。川面に木が大きく枝を張りだしている。それが少し邪魔だった。水平投げの要領で枝と水面の間を狙う。よどみのちょっと上流に毛鉤を落とした。毛鉤は流れにのってゆっくりと川面を移動する。かるく引いて動きをつける。水に落ちた虫がもがいているようにである。

五回振って鉤を替えた。場所を変えるという方法もある。釣り人はこれまでの経験で、この深みなら必ず魚がいる、とにらんだ。もし自分が魚なら、この深みを住処にしない理由はない。

出てこないなら、出てくるまで待つしかない。

釣りをする人は短気がかつ粘り強くなくてはならない。あきらめるときはさっさとあきらめる。最初からあきらめる輩は釣り師には向いていない。のんびり型も向いていない。魚はたしかに脳は小さい。その小さな脳はエサを捕ること、危険の回避に機能がほぼ集中される。その点では釣竿を握っている生き物よりは賢い。魚に敬意を払い、魚が脳に秘める二大能力の上をいく者だけが魚を釣り上げることができる。

とつぜん手元が重くなった。竿先が半円を描いて震えている。道糸から水がしたたる。糸先は

水中を下流へ、上流へと走った。

釣り人は朝からこれを待っていた。釣りをする人はみな、この手ごたえを得たいために竿を出すのである。ふだんは忘れていて、そんなものがあることさえ知らない衝動が充足される。のんびり日向ぼっこをしていた猫がネズミを見たとたんに駆けだす気持ちに似ている。心臓が常よりも早く打っている。

むりに引くとハリスが切れる。ハリスは〇・八号、一尋（ひとひろ）である。結び目で切れることもある。

糸をたるませず、かといって強くは引き過ぎず、相手と相談のうえ、魚を水面すれすれに引き寄せる。魚が持つ浮力を大事にし、ハリスと竿先に必要以上に負担をかけない。竿を立てすぎれば竿が折れる。急を要するときほど、おちつきが肝心である。

魚の口を水の外に出し魚に空気を吸わせる。魚は呼吸ができない。これで魚はだいぶ弱る。玉網に取り込みさえすればもう逃げられない。

岩魚であった。体に白いまだらが浮き出ていた。三十センチ近い。

目が合った。なにかいいかげである。口とエラをせわしなく動かしている

さて、岩魚の口を開かせ、ハリスを引いて鉤を外そうとして、それが外れない。

釣り人は「返し」のついている鉤を使ってしまったことに気づいた。

このところの釣りでは「返し」のついでない鉤を使うのがルールである。「返し」がついていると魚を傷める。ついでいても使う前にペンチでつぶす。釣った魚はまた川に戻してあげる。食用が目的ではない。遊びである。

鉤が岩魚のエラの裏あたりで引っかかっている。

先の細いペンチを口の中に差し込む。岩魚は少し暴れた。ペンチの先を岩魚の口いっぱいまで入れる。先が小さな金属にあたった。なかなか外れない。

岩魚は口を開けたまま手の中で体をくねらせた。魚が動けばますます鉤は外れない。

むりに引けばハリスが切れる。鉤が岩魚の体内に残る。あるいは鉤が肉を引いて出てくる。

左手に軍手をはめ、岩魚の体をきつくつかむ。素手でつかんだぐらいでは岩魚はかんたんに手から抜けてしまう。

左手に力を込め、岩魚が動けないようにする。

ペンチの先に虻（あぶ）ほどの毛ばりがあった。鉤に水鳥の毛を巻いてある。知らない人が見たら昆虫かなにかと見まちがえる。地面に落としでもすれば探し出すことは難しい。風が吹けば飛んでいってしまう。

毛ばりの羽に血がついていた。鉤先にも血がある。見ると、濡れた軍手の手の平に赤いしみが広がっていた。

魚はふつう、水に戻されてもすぐに逃げていくことはしない。意外なことに、しばらく考えこんでいる。突然の、予想外の解放がすぐには理解できないらしい。数秒ののち、状況を理解してゆっくりと川へ戻っていく。

岩魚を川に戻しても水に横たわったままであった。エラを閉じたとき、エラの間から赤い水が煙のように網の中に広がった。人間と同じ血の色である。魚の中にもこんなにきれいな血が流れ

ていようとは思わなかった。その「血の煙」を岩魚は二回吐いた。

釣り人は急に不安を覚えた。

彼は、「釣った魚は川に返す」ルールをいいわけに岩魚を本流のほうに押し出した。岩魚は横になったままである。口とエラを動かしている。

もう一度押す。岩魚は押された勢いで本流のほうへ流されていく。

釣り人は、そのうち、岩魚が自分の力で泳いでいってくれることを願った。

岩魚にはこれが待ち望んでいた幸運であることはわかっていた。だが、どうにも体が動かない。首から下が---岩魚にもし首と呼べる部分があるとすれば---河原の石にでもなったみたいだ。

尾びれさえ動かせればなあ。

岩魚は川底の石と空を同時に目に映しながら、そう思った。

川岸のわずかな水の流れさえ押し返せない。

なんというざまだ。

もし連中が、いまのおれさまの姿を見たら、彼らは笑うだろう。

あれだけ自慢していた尾びれがついていないも同じじゃないか。

住処のよどみが遠くなっていく。

そのときである。一羽のトビが舞い降りてきて、そのまま二本の足を川に突き立てた。

なにをつかんだのかはトビに聞くまでもない。

両足にはあの岩魚がしっかりと握られていた。

川の中を追いかけて竿の先でトビを叩き落とすこともできない。トビは賢くも、釣り人と獲物との距離を計算しての行動であった。釣り人は心の中で、トビめ、トビめ、と叫ぶしかできなかった。昼に握り飯を奪われたあの同じトビに違いない。区別の目印はないがきっとそうだ。

岩魚は体が万力のような力で締めつけられるのを感じた。

あれほど動かなかった尾びれが激しく動いた。だがそれは万力の締めつけをより強くさせただけであった。

岩魚の口もエラももう動くことはなくなった。

そこへもう一羽のトビが現れた。トビ特有の、呼子を吹くような鋭い叫びが空気を震わせた。最初のトビが同じ鋭い叫びでこれに応えた。あとからきたトビが最初のトビを上から襲う。最初のトビは反転してそれをかわした。二羽のトビの主翼が作りだす羽ばたきの音が聞こえるようだった。

二羽のトビは螺旋を描いて飛んだ。また不規則な軌道を描いて飛んだ。二羽とも、その飛びかたはなんとも無様である。長い羽がじゃまをしている。雀やカラスなら追っ手をもっと鋭くかわす。

釣り人は、この乱闘におよんでトビが岩魚を落としてくれないものかと思った。

そうすれば川の中を駆けて行って、玉網で受け止めてやる。岩魚を元のよどみに戻してあげる

最初のトビが反撃しようと反転した。相手を蹴ろうとした際にうっかり足を開いてしまった。それが攻撃をしかけたトビのねらいであった。

獲物が落ちると同時に、あとからきたトビが同じように川に向かって落ちていった。あとは説明するまでもない。

トビの鋭い鳴き声が消えたあとには、青い空だけが残った。岩にぶつかる水音が急に大きく聞こえてきた。

釣り人はしばらくトビが飛び去った方角を見ていた。

なんだか胸の具合が悪くなってきたように感じた。

太陽が山の端に隠れるにはまだ間がある。釣ろうと思えばまだ釣りを続けることはできた。

釣り人は毛ばりをハリスから切り取った。それを箱に収めた。竿をたたみ、濡れた道糸を糸巻に巻き取る。竿を竿袋に収め、ひもでしばった。

あいにく、たばこはやらない。コーヒーを沸かして飲むのもめんどうに感じた。

村へ続く道を歩きながら、釣りはもう止めにしようかどうしようか、しばらく考えた。

(おわり)